

建て氏を祀っているが、本邦唯一の海苔の神様であろう。雄勝灣の海苔養殖は明治5年同地の山下慶藏氏に始まり、松島灣・萬石浦・女川灣に於ては明治32年より42年に至る間縣水産試験場の試験指導によりその養殖が初められ、其の後業者と試験研究機關の努力と精進により海苔漁場も擴大され本縣は海苔生産縣として年間約6,000萬枚、26,000萬圓を産し、全國屈指の位置にある。

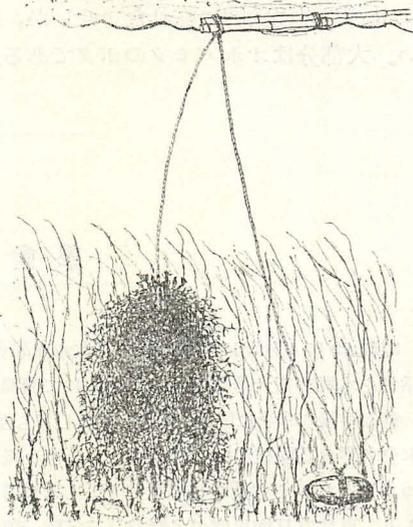
(宮城縣水産試験場氣仙沼分場)

オホバモクでウナギを捕る

黒木 宗 尙

札幌から鹽釜に移り、松島灣をあちこち舟で歩き廻るようになってから3年になる。灣内を舟であちこちしていると、大きな柄をもつて大きく体を動かさせウナギカキをやっている人、又竹筒を沈めてウナギ捕りをやっている人に屢々出遭う。ところが最近になつてこのウナギ捕りに海藻を使つているのを遅蒔乍ら知つた。或いは他所でもこのようなことは行つているかも知れないが、私としては初めてで、ウナギ捕りに海藻を使つているとすつかり嬉しくなり紹介する次第である。

ウナギ捕りに海藻の何を使つているかというところとホンダワラ科のオホバモク (*Sargassum Ringgoldianum* HARV.) である。土地の人はンシモと云つている。松島灣では灣口、灣外に生えているが、このオホバモクを採つてきて、目方にして1~1.5貫位を束ねてその1個所を縄で縛り、海に下げる。之にウナギが入るのである。



このオホバモクを束ねたものをウナギド又はボタと云つている。このボタを海に下げる松島灣はその8~9割がアマモの生えている藻場であるが、ウナギ捕りをやつている人にきくと、このアマモの生えていない所ではウナギはボタに入らないと云つている。ボタの下げ方は圖の通りで、竹の浮にボタの繩をしぼりつけ、又竹の浮には流れない様に石の錘をつけておく。又浅いところでは浮、錘を使わず、竹を海の底に挿し込み之にボタの繩を縛り付けておく。オホバモクのボタは土用前には海の底にくつつけて下げ、土用後はアマモの背の中間位の所又は上につるすそうである。つるした時のボタの大きさは1.8~2尺位の直徑である。この様にしてオホバモクのボタを下げ1日に1~2回、朝夕あげに行く。あげる時は件のボタを静かに引寄せ下から3尺位の三角の大きなタモでさつとすくいあげ、ボタの中に入つていたウナギを捕える。このボタには又小魚、カニ、エビも入る。ウナギは多い時には1つのボタに5~6匹入るそうである。1人で100~150位のオホバモクのボタを入れてウナギを捕つている。このボタでウナギ捕りをやるのは1月上旬から9月中旬頃までである。

以上のようなウナギボタに使う海藻にもう1種ツルモ科のツルモ (*Chorda Filum* (L.) LAMOUR.) がある。ツルモは灣内、灣口にあちこち生えているが、オホバモク程量的に採れないせいか、時々見掛ける程度であまり使つていない。大部分はオホバモクのボタである。

(東北海區水産研究所)

學 會 錄 事

昭和29年4月初め東京に於て日本水産學會大會の開催されるのを機とし同5日研究談話會を本郷の東大農學部水産學教室にて開催、約30名の會員が出席し盛會であつた。

會は午後6時過に開始、夕食を共にし乍ら互に懇談7時半會長の挨拶があり去る2月15日本會名譽會員國枝溥博士が逝去された事を報じ、一同起立默禱を捧げ同博士の御冥福を祈つた。それから會員新崎盛敏博士から國枝博士の藻類に關する研究業績に就いての講演があり、更に當日御出席の名譽會員三宅驥一博士から外國留學中の追憶談等を伺い更に一同懇談に時を過して午後9時前散會した。